

齋藤直子『結婚差別の社会学』刊行記念フェア
「おさい書店 女性の語り・部落問題・ラテンアメリカ」ブックリスト



はじめに——

『結婚差別の社会学』の刊行記念として、このブックフェアを開催していただきました。この本では、被差別部落出身者に対する結婚差別が生じたとき、反対する親がどんなことを言うのか、どんな行動をするのか、そして反対されたカップルはどのようにして説得するのかを、聞き取り調査を通じて明らかにしました。

このフェアでは、部落問題の本、家族関係の本、膨大な聞き取り調査から書かれた本を中心にセレクトしました。他には、執筆の助けになった、ほっとするための本と、私に新しい興味や視点を与えてくれたラテンアメリカの小説もご紹介します。

齋藤直子



橋のない川（全7巻）（新潮文庫）

住井すゑ

部落問題を扱った文学の最高峰でしょう。主人公のお母さんとおばあちゃん、幼なじみ、そして部落出身ではない同級生の女の子、それぞれの女性たちの物語としても読めます。ただし未完です。続きが知りたくてたまらない。

戦争は女の顔をしていない（岩波現代文庫）

スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ

第二次世界大戦に従軍したソ連の女性たちの膨大な聞き取り、と解説されますが、大人の女性というよりは、チョコレートやハイヒール、リボンや三つ編みが好きな、少女たち、といったほうがよいかもしれません。このギャップにまず驚かされました。

精霊たちの家（河出書房新社）

イサベル・アジェンデ

作者の祖母、母、そして自身をモデルにした、100年の物語。小説ですが、作者の叔父であるアジェンデ大統領が暗殺されたクーデターなど、チリの近代史を反映した内容です。しばしば、マルケスの『百年の孤独』と比較されますが、私は女性たちの物語としては、こちらのほうが好きです。

トラテロルコの夜 メキシコの1968年（藤原書店）

エレナ・ポニアトウスカ

1969年、メキシコオリンピック直前のメキシコ。学生運動の大弾圧で、多数の若者が政府によって殺されたのですが、メディアはそのことを捻じ曲げて報道しました。筆者はインタビューを重ねて、トラテロルコで起こったことを再構成し、事実を明らかにしていきます。作者は、オスカー・ルイスの調査をメキシコでアテンドした超有名ジャーナリスト・作家。メキシコ大地震の聞き取りの本も翻訳してほしいです。

裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち（太田出版）

上間陽子

海外のノンフィクションや聞き取りには、「女性」をテーマにした素晴らしい作品がいっぱいありますが、日本語で書かれたものにも、ほんとうにすごい作品があります。教育学者の著者が、支援や調査のなかで関係を結んでいった沖縄の少女たちの聞き取り。

屋根裏の仏さま（新潮社）

ジュリー・オオツカ

日本から米国に渡った「写真花嫁」の膨大な記録を、「わたしたち」の物語としてまとめあげた作品。一行一行が、一言ひと言が、資料に基づいた「リアルさ」に満ちています。

見知らぬ場所（新潮社）

ジュンパ・ラヒリ

ジュンパ・ラヒリの小説はどれも素晴らしいです。インドから移民して米国に暮らす家族と、日本で生まれ日本に住んでる私とはまったく人生の経験が違うはずなんですけど、かすかな痛みが伝わってくるのは何でなんだろうと不思議になります。普遍的なものを描けるってすごいなあと思います。

人生最後のご馳走 淀川キリスト教病院ホスピス・こどもホスピス病院のリクエスト食 (幻冬舎)

青山ゆみこ

大阪にある淀川キリスト病院のホスピスでおこなわれている、末期がん患者のためのリクエスト食。著者の青山さんは、リクエストした食事まつわるエピソードを患者さんに取材しています。「死」に限りなく近い人々の話なのに、不思議と暗さがなく、あたたかい印象の本です。

部落問題論と社会学

おたまさんのおかいさん (解放出版社)

日之出の絵本制作実行委員会 文 長谷川義史 絵

戦争で焼け野原になったあと、都市のバラック街になった、ある被差別部落の物語。お腹を空かせた孫も、喧嘩してる夫婦も、みんな、おたまさんのおかいさん(おかゆ)を食べて、毎日、明るく生きていきます。大人気の絵本作家、長谷川義史さんの出世作なんですよ。

ひらがなにつき (解放出版社)

若一の絵本制作実行委員会 文 長野ヒデ子 絵

子どものときに学校に行けなくて、大人になってから識字教室で字を学んだ吉田一子さんの日記を絵本にしたものです。私もかつて識字教室の「せんせい」をしたことがあるのですが、「あるある!」の連続です。大人の学びに関わる人にはぜひ読んでほしいです。

おはなしおかわり 大阪の被差別部落の民話 (解放出版社)

被差別部落の昔話制作実行委員会 編著 岡島礼子 絵

私も聞き取りに参加しました。2年かけて、寒いときも暑いときも出かけて行って聞き取りしました。なかでも「虹色のセーター」のお話が大大のお気に入りです。まず、そこだけ立ち読みしてください(そして気に入ったら買ってください)。この本を作る経験を通じて、お話や絵本の世界の奥深さを知りました。

日本の聖と賤 中世篇 (河出文庫)

野間 宏・沖浦和光

学生のとき読みました。文庫になってませんが、アジア篇と近世篇もあります。私は社会学の学生だったので社会学者を目指しましたが、部落史とか被差別者の歴史とか、めちゃめちゃ面白そうだなーと思いました。当時、沖浦先生と三國連太郎の対談なども出ていて、楽しく読んだ記憶があります。そういえば、研究室に三國連太郎のサイン色紙が置いてあったなあ。

被差別部落の青春 (講談社文庫)

角岡伸彦

いつのまにか15年以上まえの本になりましたが、部落問題を明るくオープンに語っていくタイプの本のさきがけだったとおもいます。表紙をかわいくするのも大切だっていう発想はここから学びました。

ふしぎな部落問題 (ちくま新書)

角岡伸彦

こちらが角岡さんの本。こちらは、ある程度、部落問題の知識がある人のほうが面白く読めるかもです。といっても、第4章の「被差別部落の未来」の北芝の話は、ぜひ多くの人に読んでもらいたいなと思います。被差別部落であることと、同和対策という社会的な実験の場であった歴史をうまく引き継いで、面白いことをやっている地域です。

部落問題と向き合う若者たち (解放出版社)

内田龍史 編著

部落出身者や部落問題に関わる若者のインタビュー集。しばしば、「部落の人に会ったことない」「ほんまに部落差別とか、あんの？」って言われることがあります。本を通じて若者たちのリアルに「出会って」ほしいです！

家族写真をめぐる私たちの歴史

在日朝鮮人・被差別部落・アイヌ・沖縄・外国人女性 (御茶の水書房)

ミレ 編 皇甫康子 責任編集

マイリティ女性の家族写真と本人の語り。「異常にガニ股のフィリピンのおじいちゃん」の話、何回も異常にガニ股と連呼してますが、家族写真を見ると本当にそうでした(笑)。ひとの人生に耳を傾ける面白さ、大切さを感じる本です。

境界文化のライフストーリー (せりか書房)

桜井 厚

滋賀県のある被差別部落での生活文化の聞き取り。同和対策より前の時代の、部落の暮らし。私も、この調査プロジェクトがおこなった別の市町村での調査に参加しました。「差別のことだけ聞かない」「生活全体を聞く」って大事ななあとおもいました。一方で、ひとつの問題に焦点をしばった聞き取りが必要なときもあるなあとも思います。両方いるということです。

部落問題のパラダイム転換 (明石書店)

野口道彦

私の指導教官の著作で、2000年に発行された本なのですが、同じころに『現代思想』でも特集「部落民とは誰か」が組まれたり、従来の見方で部落問題が語れなくなった時期だったのだなあとおもいます。そして、それをどう捉えるかは、施策的にも、運動的にも、研究的にも、そしてアイデンティティのこととしても、今も模索中だとおもいます。

レイシズムを解剖する 在日コリアンへの偏見とインターネット (勁草書房)

高 史明

部落問題では、しばしば「ねたみ意識」とよばれるものについての議論があったんですが、米国でも「新しいレイシズム」などの議論があって「似たような議論があるんだな」と思っていたのですが、その新しいレイシズム研究を日本で応用したのがこの本なのです。

街の人生 (勁草書房)

岸 政彦

聞き取りのテープおこしを、ほぼ無編集で並べた謎の本。聞き取りしてるときに、いろんな話に展開していったり、思いがけない話が飛び出してくる、「あの感じ」が、ほんとうによくわかります。聞き取りを1回するだけで、こんなにいろんなことがわかるんだってびっくりするかも。

カムアウトする親子 同性愛と家族の社会学 (御茶の水書房)

三部倫子

レズビアン、ゲイ、バイセクシュアルの若者たちの、友だちや親へのカミングアウト、そしてカムアウトされた親の経験や、カムアウト後の親子関係についての研究。部落出身者への結婚差別の場合、部落出身者との結婚を望む子と親の間のコンフリクトなので、直接比較できるわけではないのですが、参考にさせてもらった研究のひとつです。

入門家族社会学 (新泉社)

永田夏来・松木洋人 編

私も「結婚差別問題と家族」という章を書かせてもらいました。「入門」とあるとおり、初学者向けの本ですが、part1ではベーシックな理論、part2では最新データによる知見、part3はこれまであまり扱ってこなかったテーマという構成になっていて、オーソドックかつ、ちょっと尖ったところのある本です。

仕事と家族 日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか (中公新書)

結婚と家族のこれから 共働き社会の限界 (光文社新書)

筒井淳也

筒井先生には、私の本の帯を書いていただいています。最近書かれた新書を2冊紹介します。結婚差別問題は、差別の問題だけでなく、親子関係や家族関係を考える必要があって、さらにそのために、働き方とか家事やケアの分担など、「仕事と家族」のあり方をみていく必要がでてくるのですが、それについての量的データを援用することで、自分の聞き取りしたデータの意味がくっきり浮かび上がるんだなと思いました。

「家」を読む (弘文堂)

米村千代

筒井先生の本が量的調査によって手助けしてくれたように、こちらの本の「家」制度研究も私を助けてくれました。「家」研究を大学生向けにわかりやすく解説した本で、とても読みやすかったです。家族をめぐる法律が変えられようとしている今こそ、「家」をめぐる理論を学ぶ意味があると思います。いま読んでほしいです。

現代の親子問題 なぜ親と子が「問題」なのか (日本図書センター)

広井多鶴子・小玉亮子

しつけ、親子仲や「父親・母親論」をめぐる、データから、よくある思い込みを解いていく本です。家族を考えたり語ったりするとき、必読だともいます。結婚差別問題を、親子仲のよさという新しい視点で考えるきっかけになりました。

子育て支援が日本を救う 政策効果の統計分析 (勁草書房)

柴田 悠

統計むずかしいですね。でも、こういう「子育て支援したほうがいいんですよ！」ってはっきりデータで示してくれるものがあってこそ、われわれの聞き取り調査も生きてくると思うのです。社会学楽しい。

少女漫画とマイノリティ

ときめきトゥナイト（全16巻）（集英社りぼんマスコットコミックス）

池野 恋

アラフォー的な漫画を。吸血鬼のお父さんと狼女のお母さんをもつ女の子の物語。人間の男の子に恋をしたけど、お母さんは魔界の王子さまと結婚してほしくて、娘の恋愛には大反対…というのが最初の話なのですが、その後、どんどん話は広がっていき、2代目主人公は弟の彼女、3代目主人公は初代の娘というファミリーコメディです。ちなみに私は初代主人公蘭世の世代です。。。

街でうわさの天狗の子（全12巻）（小学館フラワーコミックスアルファ）

岩本ナオ

こちらは比較的最近の漫画です。こちらはお父さんが天狗、お母さんが人間の女の子の物語。よく読むと脇役の人生や人間関係もしっかり描きこまれていて、すごく好きです。そういえば、『ときめき』も『天狗の子』も、男の子の主人公の名前が「シュン」くんですね。

ほっとするもの4冊

樋口愉美子のステッチ12か月（文化出版局）

樋口愉美子

私の本の表紙のデザインの参考にさせていただきました。表紙、校正と同時進行で、ほんとに泣きながら刺繍しました！！でもデザイン、布選び、刺繍糸の色選びをして刺繍する作業はめっちゃめっちゃ楽しかったです。

夕方5時からお酒とごはん（PHP研究所）

伊藤まさこ

落ち込んだり元気がないときは、伊藤まさこさんの本を読みます。洋裁のデザインも、セレクトされたグッズも、食べ物もステキなのはもちろん、やりたいことをするための伊藤さんのガッツがすごくて、「私もとことんやるでー！」っていう気になるからです。

このあと どうしちゃおう（ブロンズ新社）

ヨシタケシンスケ

私、「死」をととても怖がっているのですが、なんかそれを緩めてくれます。『暮らしの手帖』の荻上チキさんとヨシタケシンスケさんの連載も、大好きです。私もαシブスで『Yeah！めっちゃ平日』のイラストを担当しているのですが、このおふたりの文と絵のコンビネーションが憧れです！！

太陽のパスタ、豆のスープ（集英社文庫）

宮下奈都

婚約破棄にあった女性が、じわじわと、まわりの人や食べ物と関係を結びなおして、回復していく話。自信をなくしてるときにぜひ読んでほしいです。豆のスープがおいしそうすぎて、読んでる途中に、ひよこ豆を炊きました(笑)。

ラテン・アメリカ、私に新しい視点を与えてくれるもの

未来の記憶は蘭のなかで作られる (岩波書店)

星野智幸

小説を紹介したかったのですが、ちょうど『星野智幸コレクション』4冊が出たところなので、お気に入りみなさんに決めてもらうことにして、私はエッセイ集をおすすめします。日本だけじゃなくて、台湾や朝鮮半島、メキシコなど他の場所にも軸足を置くことで、人は強くやわらかく生きていけるのです！

誘拐の知らせ (ちくま文庫)

G.ガルシア＝マルケス

なぜ、部落問題と家族社会学の本のブックフェアに、こんなにラテンアメリカの本があるんだと思われるかもしれませんが(笑)。星野さんのエッセイ集のところでも書いたように、私の軸足なんです！ ガルシア・マルケスからは、ジャーナリスティックな香りのする2冊を。

予告された殺人の記録 (新潮文庫)

G.ガルシア＝マルケス

ガルシア・マルケスのこの2冊は、大量のデータをびったりはめ込んでいく感じが、めっちゃめっちゃすごいです。私も聞き取り調査を仕事にしていますが、データを最適な場所にびったりはめ込んで初めて、訴える力を持つんだと思うので、こういうものを目指していきたいなと思います。実力の差が違いすぎますが…。ところで、この小説、映画化されてたんですね(知らなかった)。『コレラの時代の愛』の映画は、同郷の歌手シャキーラが主題歌うたってましたね。

つつましい英雄 (河出書房新社)

マリオ・バルガス＝リョサ

ジョサ(この本ではリョサになってますが)もノーベル賞作家でめっちゃ大御所なので、私が紹介するまでもないのですが。2つの物語が1章ごとに交互にあらわれます。マフィアからの脅迫に立ち向かった話は、実話のもとになってるそうです。装丁がしゃれていて、カバーをはずすと、本の表紙に蜘蛛からの脅迫状がスペイン語で書かれています。

貧困の文化 (ちくま学芸文庫)

オスカー・ルイス

学生のとき読んで「フィールドワークしてみたい！！」って憧れてました。作中に出てくるテピート地区のベシンダー(集合住宅)は、85年のメキシコシティ大地震でほとんどなくなってしまったと、メキシコシティ出身のスペイン語の先生から聞きました。テピートの地名は、“Te pito(私はあなたを口笛で呼ぶ)”が語源で、共同住宅の壁の向こうにいる人を呼ぶときに口笛をふくという生活習慣から来てるんだそうです。

オスカー・ワオの短く凄まじい人生 (新潮社)

ジュノ・ディアス

ラテン・アメリカの小説は、それぞれの国の歴史(多くは独裁政権と新自由主義による貧困や移民、そしてその背後には米国がいるわけです)とは切っても切れないものが多いです。この本は、ドミニカ共和国にルーツをもつ米国人のナード(オタク)青年の話で、彼のルーツの重い話と、彼自身の非モテ話が融合して、独特の雰囲気です。関係ないけど、ドミニカ出身の歌手といえば、ファン・ルイス・ゲーラが大スキです。

パライソ・トラベル (河出書房新社)

ホルヘ・フランコ

美女レイナに連れられて、コロンビア人の若者マルロンが米国をめざす物語。もともと、作者の同郷の歌手ファネスが大好きで手に取った本です。米国とメキシコの間「壁」について、ラテン側からみてほしいなあとおもいます。この小説は映画化もされていて、その主題歌はコロンビアの歌手フォンセカが歌っています。この映画のサントラ大好きです。

この道の向こうに (小峰書店)

フランシスコ・ヒメネス

こちらも『パライソ・トラベル』と一緒に、メキシコと米国の国境(ラ・フロンテーラ)を超えた人たちの物語です。家族全員で、非正規滞在の季節労働者として必死に働きます。主人公は著者自身で、子ども時代の著者の目線から、米国での生活を描きます。すごくいいです。続編もあり。

[選書&紹介文] 齋藤直子

*掲載された書誌情報に誤りがございましたら、悪しからずご了承ください。

また、出版社の事情により品切・絶版の可能性のある本も含まれています。

*リストの中には店頭でご準備のない書籍もございます(出版社に在庫があるものはお取り寄せいたします)。

結婚差別の社会学

齋藤直子

僕も、結婚差別の相談をされたことがある。当時この本が出ていたなら、間違いなくこう言っただろう。「この本を読むといいよ。君の力になってくれるから」

——荻上チキさん

恋愛結婚の時代だからこそ立ち現れる差別問題がある。現実の調査結果が突き崩す「自由な結婚」という幻想。

——筒井淳也さん

●定価:本体2,000円+税 2017年5月刊行

四六判上製 312頁 ISBN978-4-326-65408-6 C3036



勁草書房 〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1 TEL 03-3814-6861 FAX 03-3814-6854